

2018年5月12日(土)

東海日中関係学会

日中平和条約締結 40 周年記念事業 「私の見た素顔の中国」

星屋 秀幸

1. 略歴(学生と今日までのキャリア)

1950年岐阜県下呂市の鍛冶屋、5人兄弟の末っ子として生まれ、経済的に厳しい状況下、両親・兄弟の温情で進学のコツをもらった。1969年全国的な学園紛争で大学受験は混乱。何とか名大に入学でき、土木工学を専攻するも、「中国・アジアの人々と触れ合う仕事したい」との思いが募り、三井物産に入社。当初は鋼材国内営業部門で鍛えられたが、1979年会社の留学制度で戦後初の北京留学生となって中国語を習得する。1981年から天津事務所初代駐在を4年、新日鉄の受注せる渤海の日中石油開発プロジェクト・天津国営無線電廠と東芝とのカラーTV国産化事業などに参画。1985年から中国陸上油田の大慶・タリム・四川・遼河・中原・宝鶏など中国内陸各地を訪問、市場調査や技術交流を実施、新日鉄の開発した石油鋼管の輸出を担当。1991年からは宝鋼集団と戦略的業務提携を推進、1995年45歳で三井物産上海社長として赴任。2003年までの8年間、上海経済高度成長時代に8年の任期を務めた。その間、2000年には上海商工倶楽部会長として日系企業をリードした。上海浦東開発プロジェクトに注目、森ビルの上海事業に協力、三井物産上海オフィスの浦東移転を決断。帰国後、縁あって森ビルに転職、2014年64歳の時に、上海環球金融中心有限公司、上海森ビルの社長として再び上海に赴任。2016年に帰国し、現在は森ビル六本木ヒルズにある森ビル本社で特別顧問として日中交流を推進。

2. 日中平和条約締結 40 周年と日中関係の現状

日中両国は2000年以上の友好交流の歴史がある大事な隣国。日本は中国から沢山のことを学んだ。中国は清朝時代末期に西欧列強が侵略し、日本はこれに同調。不幸な日中関係が1945年まで続く。1972年に日中国交正常化が実現し昨年は45周年、2018年は日中平和条約締結40周年。中国は1966-1976年「文化大革命」の社会的混乱から脱却、1978年から改革開放の路線に転換するも当初は経済が疲弊し、日本のGDPの数分の一程度に過ぎなかった。1979年12月大平総理が訪中、中国経済建設に全面協力を約束し大胆な円借款など提供。鉄道・港湾・空港・発電等インフラ建設及び人材育成に注力。

中国は市場経済化路線の下、順調に発展して、2010年にGDPが日中逆転、今や中国のGDPは日本の2.5倍となり、世界一の米国を猛追している。最近ではAIやITなど駆使した画期的なニューエコノミーによるビジネスが中国で続々と勃興し、深センには中国版シリコンバレーが登場、日本をしり目に、人口14億人の中国が世界経済を力強くリードし始めている。中国は「一带一路」を提唱しユーラシア大陸を横断的に経済融合させようと野心的な国家プロジェクトを推進しつつある。世界の大国となった中国とどのように向き合うのかは日本に問われた大きな課題といえる。先日、上海から帰任した中国通を自認する総合商社現地法人の社長であった友人は：

「ネット通販、スマホによる電子決済、シェア自転車、配車アプリ、出前アプリなど新しい生活スタイルは市民の実生活に急速に浸透し、財布を持たない消費が新常态として中国に定着している。想像よりもはるかに便利なので、現地駐在員の日本人もこの新しい消費スタイルにすっかり馴染んでいる。」

私も上海に毎月のように出張しているが、上海秘書に教わりながら中国ではキャッシュレスを謳歌している。日本に帰ると財布を持ち歩く生活が不便に感じる。おそらくアリババ・テンセントが牽引したネットによる消費革命のライフスタイルがいずれ日本に押し寄せることは確実だと予感している。米国のグーグル、アップル、フェイスブックそして中国のアリババ、テンセントに対抗するような日本企業はまったく見当たらない。中国社会の余りの変化の速さと規模の大きさに日本が着いていけない現実をどうするのか。

3. 私のキャリアから、皆さんに伝えたいこと・期待すること

私が長年の日中交流で貫き通したものは「志・挑戦・友情」。中国とのビジネスでは幾多の失敗や挫折に見舞われたが、私を励まし救ってくれたのも中国の友人。これから少なくとも30年は「中国の時代」になる。日本はどう向き合うのか。日中関係は日本の最重要課題。中国を自分の眼で正しく見ること。真の国際人とは外国語が得意ということではなく、少なくとも一人の外国の真の友人がいること。日本にとって最重要市場であるアセアンに多数の中華系の人々がいる。中国・台湾・香港が一体となり東アジアの大中華経済圏が形成されつつある。日本はある意味、アジアのマイノリティ。外から日本を見つめてみれば色々なことが分かる。かつて遣唐使は命がけで中国・唐に渡り、長安で多くのことを学んだ。阿倍仲麻呂は最難関の科挙の試験に見事合格し、30年以上も皇帝の側近として仕えた。天才空海は唐で大活躍をし、仏教經典のみならず建築・治水・鉱山・薬学など多くの知識を日本に伝えた。飛行機で上海まで3時間足らず、本当に近い。中国はこれからも世界の大国を目指してダイナミックに発展してゆく。世界のホットスポットになる中国・アジアに向けてチャレンジして欲しい。

3. キーワードで語る中国

- 1950-2040年の90年を3つの30年で切り分ける
 - 1950-1980年 毛沢東路線・立ち上がり・計画経済（ソ連を意識）
 - 1980-2010年 鄧小平路線・豊かになれ・市場経済（日本を意識）
 - 2010-2040年 習近平路線・強くなれ・一帯一路の大国（米国を意識）

○上海経済圏の富裕層は日本ファンが多い

- 日本の自然・文化・伝統・食事・礼儀に感銘、医療も老後日本で交流が盛ん
- 中国若者のアニメ・小説・ドラマなど日本文化に高い関心、日本語堪能
- 上海人は開放的、上海実業家は洗練されて国際的、实际的
- 政治の中心・北京から離れ、西洋諸国との融合の歴史独特の風土

○中国は後発国の優位性の活用し一気に世界の最先端に

- （日本は先発国に安住し立ち遅れる、変化と発展を茫然と見つめる）
- 80年代、一般家庭にまだ固定電話が普及していない時代、固定電話が普及する前に携帯電話の時代を迎えた。携帯電話普及数は13億台
- ネット人口は7.5億人、スマホ決済額は660兆円、日本のGDP超え
- 何故キャッシュレスが実現したか。
政府が個人情報完璧に管理。偽札や不衛生な紙幣への不信感
- ネットを活用したヒト・モノ・カネ・サービスの流れが急速に普及。
蓄積するビッグデータを新たにビジネスに展開

○日中認識格差

- 日本国内では中国の実情、変化やスピードに対する認識が相対的に希薄
- 多くの日本人は相変わらず古い情報と偏向記事で中国を批評。企業では社内に現地との認識ギャップ、特に中国社会の実情やライフスタイルの変化を正しく認識できないままで立ちつくしている。

4. 視点

- ・日中関係の不安定要素：歴史認識・台湾・領土・領海など敏感な問題多い
- ・社会体制の相違：中国は一党独裁・大国志向・価値多様性に不寛容
- ・引越しのできない隣人関係：運命共同体・相互依存・相互補完・winwin
- ・インバウンド：国民感情の改善、大多数が日本を好感
- ・客観的な中国分析：歪んだ日本のマスコミ報道、先入観を排除、等身大を知る
- ・日本内向志向：慢心・安住は亡国、若者は大志を抱け・打って出よ（了）